

長崎丸山における通り・路地及び景観の変容

株式会社オオバ 大阪支店 鶴田好美

1. はじめに

(1) 花街とは

かつて日本には数多くの遊郭が存在していた。その中で売春を業とする娼妓とその他の芸(唄や舞踊、三味線など)を業とする芸妓との分離が図られたことにより花街が発生する。花街は唄や踊りの古典芸能から、料亭、検番、待合、置屋の建造物まで、ソフト・ハード両面にわたり、日本の伝統的文化を包括的に継承しており、歴史的にも重要な価値を持つ都市空間だと言われている¹⁾。しかし、全国にあった花街も戦後の経済成長の際に減少し、現在は少なくなっている。(図-1 参照)

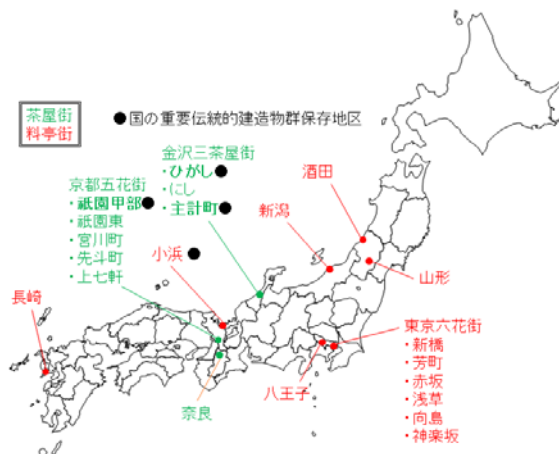


図-1 全国の花街の位置と分類

(2) 長崎丸山の歴史

長崎では、1571年にポルトガル船が長崎港に入港し、多くの人が集まるようになると、町外れに遊女屋が建ち始めた。1642年、幕府の命により長崎奉行所は、遊女屋を一箇所に集め、幕府公認の丸山遊郭が誕生した。丸山遊郭の遊女は日本人のほかにも中国人やオランダ人の相手もしており国際的な色街であり、江戸の吉原、京都の島原に並ぶ日本三大遊郭のひとつであった。この時代が長崎丸山は色街としての全盛期である。その後、1781年頃に大阪から長崎に芸妓が入ってき、長崎丸山に花街文化が広がった。1958年の売春防止法により、遊郭に類するものは全て廃止となり、長崎丸山は花街だけとなった。全国の花街が衰退する戦後の経済成長の際に、長崎でも花街が衰退したが、料亭などは高度経済成長や炭鉱の好景気によって潤い、消滅せずに存続し続け、現在も芸妓の活動が行われている。2000年前後には「長崎ぶらぶら節」が話題となり、長崎丸山の観光客が増

加し、看板やパンフレット等が作成されたが、長崎丸山の歴史的景観を保存する法律や条例は制定されておらず、歴史的景観が失われつつある。

(3) 現在の長崎丸山花街

2016年現在の長崎丸山花街の花街建築は料亭が2軒、検番が1軒だけであり、長崎県内に現存する検番は長崎丸山花街内にある長崎検番だけである。長崎検番の抱える芸子衆は17名である。長崎の芸妓を呼べる料亭は、長崎丸山花街内外に11軒ある。長崎丸山花街では「丸山華まつり」が毎年11月に開催され、その中で踊り奉納、花魁道中・女神輿練り歩きなどが行われている。(図-2 参照)



図-2 丸山華まつりの様子 (2016. 11)

2. 目的・研究方法

(1) 目的

長崎丸山の歴史的建造物の残存状況、景観阻害要素についての研究は行われており、現在の長崎丸山の景観の実態については明らかとなっている。また、戦後から現在までのまちづくりの経緯は明らかとなっているが、景観の変容については明らかにされていない。

本研究では、江戸時代後期から2016年現在までを調査する。通り・路地がいつごろから発生したのか、また、景観の変容を明らかにする。

(2) 研究方法

長崎丸山の古地図、戦後の航空写真より、図を作成し、通り・路地の変容を調査した。また、通りと路地の幅員を計測し、現況を明らかにした。丸山の絵図や古写真から江戸後期、明治・大正、昭和戦前、戦後、現在の景観の様子を5時代に分類し、過去の建造物の用途と通りと路地の関係を分析した。

3. 通りと路地の変容

江戸時代から寄合町通り、丸山本通り、片平町通りを中心に使用されており、梅園天満宮とそこに続く梅園通りも当時から存在した。昭和初期には小さな路地もでき、現在のような通りと路地になっている。戦後は妓楼が消失し、通りに変化が見られる。現在の丸山花街の幅員構成を半間ごとに分類し、2間半以上を通り、2間半未満を路地とした。

変容と現況を比較してみると、幅員の広い通りは江戸時代から使用されていることが分かる。また、形状も当時から変わっていない。このことから丸山本通り、片平町通り、寄合町通り、梅園通り、梅園天満宮は江戸時代から長崎丸山の中心の通りとして存在していたことがわかる。

1間未満の路地は比較的新しい時期に発生している。昭和9年1月県通牒により私娼の集娼制度を取るため、長崎市及び佐世保市に散在する3等料理屋(暖味料理屋)の営業地域を在来の貸座敷免許地域である丸山に移転させた²⁾。このことにより昭和初期の細い路地が発生したと考えられる。この背景には1933(昭和8)年長崎博覧会の開催が関わっている可能性がある。1879(明治12)年の丸山の大火により明治中期以降の路地が増えた可能性があり、また1943(昭和18)年11月に起こった大火災により、現丸山公園の妓楼が消失し、通りが一部変わっている。このように丸山の通りや路地は火災を起因として変化している。

4. 景観の変容

表-1に変容する建物、通りの様子、移動手段をまとめた。

- ①江戸後期：建物は木造2階建ての遊郭が建ち並んでおり、建物の戸や窓は格子となっている。路面の高低差がある部分は階段となっている。街灯は木灯籠が立っている。
- ②明治・大正前期：建物は木造3階建ての建物が建ち並んでいる。2、3階は通りに面して廊下があり、欄干は格子状になっている。この時代は人力車が使用されていたため、階段はスロープになり、舗装されている。通りの中央部分と建物の入口部分のみ石畳舗装となっており、両側に水路がある。街灯は傘の下に提灯が付いているデザインの提灯やモダンなガス灯が掲出されている。建物の屋根に小さな裸電球や、遊郭である建物にはひさし部分に提灯が掲出されている。
- ③大正後期・昭和初期：建物や街灯は明治期とあまり変化が見られない。丸山本通りは石畳の貼り変えが行われており、石畳が全面に斜めに敷かれている。水路は埋められ、石塀や板塀が設置されている。寄合町通りも同様に大正後期には全面斜めの石畳舗装になったのではないかと考えられる。
- ④戦後：1933年の長崎博覧会により、長崎の遊郭が丸山に集められ、路地にそれらが建ったと考えられ、それまでと遊郭の雰囲気に変化している。また、1946年に公娼制度の廃止と1957年に売春防止法が施工され、法制度が変わったこともあ

り、昭和後期に店の転用があったと考えられる。木造の建物、コンクリートの建物が入り混じり、遊郭であった建物が料理屋や旅館に転用されている。この時代は人力車から自動車へと交通手段が変化しており、通りは全面石畳舗装となっている。丸山本通りは水平方向に、青柳の前の通りと寄合町の通りは斜めに敷かれている。街灯は電飾看板が増えている。通りの両側に花柳界の象徴とも言える柳の木が植えられており、雑多ではあるが、花街としての景観を残している。

- ⑤現在：通りの景観は検番や料亭といった現在も活動が続いている建造物のほか、石畳風舗装も貼り替えられ続けている。しかし、遊郭であった木造の建物はほとんどアパートやマンション、医院、駐車場などに転用しており、統一感が失われ、通りの景観から花街の雰囲気はあまり感じられない。一方、路地の景観は小規模な歴史的建造物が残存しており、その周辺の石垣や石畳により花街の雰囲気を感じられる。

表-1 時代の変遷と景観の変容

時代	建物	通り	景観	車
江戸時代	2階(丸山1階) 遊郭の地味 注釈 不造3階建て	階段	木灯籠	
明治・大正前期	3階(寄合町) 廻廊付 不造3階建て	スロープ	石畳(車道のみ) 水平方向	人力車
明治後期・昭和初期	1933(昭和8) 長崎博覧会 売春防止法の全面適用	斜め方向	石畳(全面) 斜め方向	自動車
戦後	1957(昭和32) 公娼制度の廃止 1957(昭和32) 売春防止法	1955年貼り替え 水平方向	外灯・電飾看板 ガス灯風ランプ	
現在	コンクリート	2005年貼り替え 水平方向	電飾看板 ガス灯風ランプ	

5. おわりに

本研究により、通り・路地の変容と景観の変容について整理がなされた。

江戸時代から昭和初期まで、長崎丸山は色街と花街が入り混じった独自の空間として存在し続けてきた。公娼制度の廃止や売春防止法の施行により、遊郭に類するものは廃止されたが、現在もなお花柳界は存在し、検番や料亭は営業し続けている。これらは通りの歴史的景観を示すものとして存在している。しかし、通りの景観を構成するものはかつての花街建築が転用した近代の建造物のみであり、通り全体では花街の雰囲気を感じられない。一方、路地は複数の建造物や土木構造物によって景観を構成しており、花街の雰囲気を残している。今後は、路地における歴史的景観の構成要素は残しながら、通り全体を統一感のある景観へと改善することで、長崎丸山全体が花街の雰囲気を感じられる街になると考えられる。

参考文献

- 1) 加藤政洋：花街 異空間の都市史，朝日新聞社，pp. 4-72，2005
- 2) 長崎市編さん委員会：新長崎市史 第三巻近代編，長崎市，pp. 747-750，2015